

○山口知事

今日は 31 回目の会議ということで、溝上委員を新たに迎えまして、さらに議論を進めていきたいと思っています。

今日の議題は「自分で考え行動する子ども」、自分で考え行動する子どもって、言葉は分かりやすいですが、どう解釈するのかが実は難しく、私の言葉で言うと、色々な人に相談してもいいから、決断は自分です。、自分が決断したことに関しては、失敗しても自分の教訓にもなる。やはり人に依存して色々な決定をするとどうしても依存するというか、親や先生がこう言ったからこうなったということにならないように、やはり決断、人生って結局分かれ道の連続で、それ自体はもう普通のことだと思う。最初から決められた人生はなかなかなくて、色々な選択肢の中で、小さな悩みから大きな悩みまで抱えながらみんな生きているので、自分で決められるところに、みんなが共通の意識を持てばいいのかなと思っています。

ただし、もちろん色々な例外もあり、それをどのように説明していくのかということも課題と思っています。

教育大綱も「自分で自分のことを決められる子どもを育てたい」と書きました。それをどう現場に落としていくのかということは色々な議論があると思うので、今日は改めてその内容について、皆さんの意見を賜って、さらに充実していきたいというふうに思っていますので、よろしくお願いします。

以上です。

○藤崎政策総括監

それでは、会議に入ります。

本日は意見交換テーマを 2 件設定しておりますけど、時間の都合を見ながら、防災のテーマにも挑戦させていただきたいと思っております。

それでは、まず政策部のから説明させていただきます。

先ほど知事から話があったとおり、教育大綱 vol.3 を令和 6 年 1 月に策定しました。骨太でたくましい子どもを育てるために自分で決められる子どもということと、失敗してもいいから挑戦できる子どもたち、かつ、いつでも相談できる、そういうトライ・アンド・エラーを繰り返しながら子どもたちの個性を伸ばしていく、子どもたちを応援できるような社会ということで、これまで教育大綱というと分厚い冊子形式でしたが、分かりやすく、すぐ目に入って、頭にも入るような、コンパクトな形式のものを策定しました。

教育大綱 vol.3 を策定して 1 年以上が経過しましたが、教育大綱を基に、学校現場でもいろんな変化があったりとか、子どもたちも、教員の方も、これから徐々に変化していく兆し

があると思うんですけれども、そういった学校現場のことを教育長から御紹介いただいて、意見交換いただければと思っております。

次、教育長お願いします。

○甲斐教育長

今、教育大綱のお話がありました。この総合教育会議でも、私たちは子ども自身が自ら考え、判断し、行動するということが大切に議論を重ねてきたと思っております。

最近の動きについて紹介したいと思います。

例えば、佐賀西高校ですが、令和6年4月から標準服制度、いわゆる今までの制服というのが標準服という位置づけになりました。式典などの際にはこの標準服で、それ以外は自由な服装、私服で登校することが可能となって、もう1年近くになります。一人一人が自分自身で考えた服装で登校していきまして、気温に合わせてとか、体調に合わせて私服を選んでいきます。

○山口知事

標準服は全員持っているのですね。

○甲斐教育長

持っています。

卒業式や入学式等は、そろえると。約半数の生徒が私服登校しているということで、非常に生徒自身もやりやすいと、良い評価を得ています。

この他にも幾つか生徒発案で見直された事例があります。

例えば、中学校で頭髪の規定を男女同一にすること。靴下の色は自由に選べることに、そして、名札や体操服用のゼッケンの廃止、大きく名前を書いて登下校するのはいかがかと。それらも生徒発案でございます。

そして、高校では、スクールバッグ、決められた校章が入ったものでなくても自由にとか、通学靴も皮のローファーでなくてもスニーカーとか自由に履きやすいものを。学園祭の時に自分たちもスマホで写真を撮りたいので、それは取り出して撮影できるように、普段はしまっておくんですけど。自分たちのことは自分たちで決めるという、よい流れができているかなと思います。

ここから学びのことに入ります。今、各学校では教科の枠を超えて総合的な探究学習をやっています。小城高校での事例を紹介したいと思います。

小城高校では共生社会をつくっていかうと熱心に取り組まれています。その推進リーダーを「さがすたいる」ならぬ「おぎすたいるリーダー」と呼んでおり、生徒たちが、弱視体験用の眼鏡を装着して、白杖を持って、それを介助する人、車椅子に乗って、それを介助する人に役割を分けて、学んだことが実際にまちでどうなっているか、小城駅周辺に実地調査

に行きました。

普段通学しているときに気づかなかったことが色々気づいてくる。例えば、駅のアナウンスの音量が小さくて、情報を得るのが難しいのではないかと、駅の券売機の前に柵があるが、車椅子に乗った人は柵につかえて近づけないとか、点字ブロックが一部破損していて危ないと、これらについて改善策を考察しまして、小城市へ改善策を提案する機会がありました。

例えば、スピーカーですと台数を増やすことがすぐ考えられるのですが、学んでおりますので、特定の方向へ音を伝える指向性スピーカーを導入したら良いのではないかとということ、それから、券売機の柵については、荷物を置くのに確かに便利ですが、ここの前だけは切り取って、横に荷物を置いて、そうすると車椅子でぎりぎりまで近づける、子どもの手が届くという提案。

それから、破損している点字ブロックは、これはもうすぐに修繕していただいて実現しているもの、このように自ら学んで気づいて考えて行動したことが、まちの中の実際の変革につながるという手応えを生徒たちは感じています。

もう一つ学びの中で事例紹介で、唐津西高校です。探究活動を進路実現につなげようと、新しくコースをつくっています。1年次からフィールドワークに出かけまして、自分の興味・関心のあるテーマについて、企業の方、地域の方、行政の方と話をしながら、自分の学びをどういったところに定めようか、テーマをどこに定めようか研究をします。そして、2年になったら考えを深めていって、3年次には考察してまとめていく。そして、進路につなげるという流れになっています。

先日、探究プレゼン大会、佐賀県立大学（仮称）専門家チームの先生方に評価していただいたんですが、そこにも佐賀西高校の生徒も出まして、代表のチームが良い評価をいただいて、かなり手応えを感じていますし、公立も私立も合わせて26校出場しましたが、先生方に本当に評価いただいたことが励みになって、さらに皆さん次の学びにつながっていく、そういう良い動きが今出てきていると思っております。

○山口知事

学校によって取組の内容は異なりますか。

○甲斐教育長

そうですね。それぞれ特色があって、学校の特徴を活かしていると思います。

○山口知事

高校でそうだけど、中学校、小学校のそれぞれのレベルによってのやり方は異なりますか。

○甲斐教育長

そうですね。探究的な学びということで、教科で学んだものを活かして使う場面を作るということで。

○飯盛（いさかり）委員

小学校はまだ先生から課題が決められることが多い。中学校になると職場体験などもあり、自分で課題を見つけてという方向になってきていると思います。

○山口知事

溝上さんは、小学生時代は、どのような感じでしたか。

自分で決めたりしていましたが、色々なことを決めようと思ったりしていましたか。

○溝上委員

多分、そんなに選択肢がなかったような気がしますよね。授業にしても普段の生活にしても、せいぜいやりたい習い事とか塾とかを決められるぐらいの範囲だったような気がします。

○加藤委員

私も先ほど教育長がおっしゃったように、県立、私立 26 校の探究プレゼン大会にうちも出たんですよ。大学の先生から評価をもらうのがすごく大事だなと思って。高校生って、私達が思っているより考えていると本当に思います。やはり高校生の意見をどんどん取り入れて、それを県立大学に繋げれば何か良いのではないかと私は少し感じた次第でした。

○山口知事

その先の学びが分かるような、つながるような取組ができれば。

○加藤委員

すごく大事ですよ。

○山口知事

小学生の頃、仮分数がどういう意味を持つのかなんて、「えっ？」だよ。

「2分の3」を「1と2分の1」にするってどういう意味なのか分からなかったよね。

○加藤委員

学びの連続というか、どういうふうに繋げていくかという。小学校から中学校、高校から大学というふうに連続性を見いだせたやり方が、佐賀県ではできているんですよ。

○山口知事

そう。だから、今、大学と高校が連携すれば、非常に面白いので。

○甲斐教育長

大学になったら学問なので、学問でつながると専門というか、すごい憧れのところかなと。

○山口知事

高校と大学って何が違うかという、大学って自由だろう。俺、先生に言っても、高校だったら構えちゃうけど、大学って何しゃべってもいいので、正解がない世界がある程度あって、だよなあみたいな、俺はこう思うけどみたいな、

○平尾部長

この間の探求学習のプログラムも、生徒たちだけでなく、そこに関わる先生たちとのディスカッションがあって、どこかの高校は窯元まで行ってからお話をしたり、社会実装の一手前ぐらいまでいっていたので、高校生は色々なことを考えていて凄いなと感じた。県外勤務の3人の先生にお越しいただきましたが、出来栄えにお褒めの言葉が上がっていました。

○山口知事

佐賀県立大学（仮称）ができる前に色々なことができそうですね。

○平尾部長

そうなんですよ。

○甲斐教育長

ぜひ。

○平尾部長

もう既に何か始まっているなって。

○山口知事

新しい形がね。

○平尾部長

新しい形が。本当に良いなと思いました。

○加藤委員

12月に県から連絡がきて、プレゼン大会の参加者を募集されたでしょう。短期間であれだけのことがやれるんだなと思ったので、高校生の力はいっとも発掘できるのではないかと思いました。

○山口知事

(文部科学省の)中教審の答申を見ると、僕らが今やりたいことが結構そのまま書いてある感じがして、指導要領はともかく、求める方向性というのは悪くないなと思ってさ。

○甲斐教育長

すごく練られていますね。

○山口知事

佐賀県は、実践的にできる新しい大学だから、先生も自由にできる。

○加藤委員

それが良いですね。

○飯盛(いさかり)委員

2月から3月にかけて、水曜日だけですが、小学校の教壇に立ってきました、2年生の教室に入って、国語、算数、体育をやってきましたんですが、9年間、中高生を相手していたので、ギャップが激しくて、もう何でもかんでも聞いてくる。高校に帰って、高校の先生に話をしたら、「高校生もあまり変わりませんよ」と言われました。

今回の会議テーマが分かっていました。そのような視点でまとめたのは、子どもの心理として、勝手に判断してやって間違えると恥ずかしい思いをするとか、さっきの大綱の中に失敗してもいいよというところ、それから、間違えて怒られたとか、そういう経験があるのではなかろうかと。

あと、4月当初、担任が変わると、教師を試す意味の質問とかですね、どこまでこの先生は許してくれるんだろうとか、そういったものもあるのではないかなという気がします。

あと、低学年の担任経験が多い先生の話によると、幼稚園、保育園の保育姿勢といいますか、自由保育から来ている子どもたちは割と自分たちで考えてやるんだけど、そうでないところもあるんじゃないかなという話もありました。

それから、家庭の子育てということで、保護者が忙し過ぎて、しっかりここは考えさせないといけないようなところでも、分かったね、したら駄目よ、分かったって、子どもはそこは何も分かってなくてもそれで進んでいくとか、そういう実態もあるのではないかなと。

小学生の高学年ぐらいになると情報化社会、スマホも小学生は持っていますので、考えるよりも調べ方も分かっていると思いますから、どんどんどんどん調べる。良い面もあるとは

と思いますが、考える力を伸ばすのには懸念する部分があるかなと。

私が常々思っていたんですが、小学生時代を思い出されてみて、明日の時間割とか、明日持ってくるもの等は、多分担任の先生から言われたことをメモしていたと思いますが、今は、6年生まで小学生は時間割と勉強する中身と持ってくるもの、紙で配っています。1年生はまだしょうがないと思うんです。1年生、3年生、6年生と上がっていきますので、学年に応じてそれをメモに書いていくということを先生へ提案したところ、学校全体で取り組んでもらわないと、自分1人ではとてもそんなことできませんと。

○山口知事

（飯盛（いさかり）委員持参の資料を見ながら）時間割って1年に1個じゃないの。

○飯盛（いさかり）委員

国語、算数とか、月曜日の時間割とかあるんだけど、もうそこまで。

○山口知事

すごいね。こんなところで。びっくりだね

○山口知事

先生大変じゃん、これ。やっているの。

○飯盛（いさかり）委員

持ってくるものまで丁寧に書かれています。

○飯盛（いさかり）委員

多分驚かれると思いますが、テストの前に、出題範囲だけではなく、学習のポイントまで書かれた用紙が生徒に配布されています。

○飯盛（いさかり）委員

その理由を教員に尋ねたところ、ここまでやっても勉強しないんですよと言っていました。そういう今やろうとしていることと全く真逆の実態があり、多分どの学校も一緒だと思います。

○山口知事

試験範囲が明確になっているから、そこだけちゃんと勉強しようという気持ちになるのではないかな。

○飯盛（いさかり）委員

今進め出して1年ですから、できるだけ下の低学年のほうから先のことを考えて改善していくと、6年後、9年後ぐらいには随分目指しているところに近づけるんじゃないかな。そのために学校種を問わず、全部の学校で、それから家庭も保護者に理解を求めていく必要があるというのが私の考えです。

○山口知事

モチベーションが大事ですね。学習が1回遅れると、どんどん進んでいって。どこかで先生は放課後に教えたりするんですか。

○飯盛（いさかり）委員

働き方改革で放課後等に時間を確保することが難しくなっている。

○甲斐教育長

中学校は補習授業とかはやっています。

○飯盛（いさかり）委員

中学校によっては遅れている学習、提出できていない課題をする時間を確保している学校もあるようです。

○山口知事

離島の学校では、放課後にフォローしていた。しかし、どの学校もできることではないからね。

○飯盛（いいもり）委員

例えば、城西中は、佐賀大学の学生がボランティアで教えに行っていますよね。

○山口知事

それもやっているよね、幾つかね。

○飯盛（いいもり）委員

そういうのがある学校とない学校で全然違うだろうし。

○荒木委員

多分質問をする力というのが少ないかなと思っていて、学生さんや子どもと話すと、先ほどの話にも上がった通り、これをやったら怒られるからと質問してくる子はいるのですが、この目的を達成した、これをやりたいから、そのためにこんな質問をするって、例えば、テ

ストでいい点を取りたいから質問するんだって、怒られるから質問するのではなく、怒られないように、失敗しないように質問するのではなく、自分がこういうふうにまちを良くしたいんだ、学校を良くしたいんだ、テストでいい点を取りたいんだって、自分の目的に沿って質問をしてくれる子が少ないなというのは自分でも思っています。質問するのはすごい難しい、考えないといけないから、難しくて、何かそういう力がこれからの子どもは養ってくれたらなと思っています。

○山口知事

良いね、質問する力。

確かに思い出してみると、小学校のときって間違ったら恥ずかしいというのが大人になった以上に大きかったりするよね。今になってみると間違ってたっていいやって思えるが。

○飯盛（いさかり）委員

学習面で分からない事を何でも質問してきて良いと言うのだが、子どもは質問をしたら、そんなことも知らないのかって思われるんじゃないかなろうかと考えたり、実際にそのような経験もあるのかもしれませんが。そのため、結局、質問せずにテストの際に理解していない場合がある。そういう実態が多いと思います。

○山口知事

それを改善したい。

僕は、県民の皆さんに話すときも、できる限り分かりやすく話そうと意識している。。分からない話を俺が幾ら難しい言葉でやっても、それって楽しくないので。だからそこを共有できて恥ずかしくないよって、みんな。みんながうなずいて、そうだそうだと思うような環境だったら授業が楽しいのに。みんな分からない授業ってつまんないよね。

○平尾部長

教えている側もリアクションがないと、手応えがないですよ。

○笹谷教育振興課長

間違っていていいんだよって。間違ったら、正解に持っていく過程が大事と思う。

○山口知事

先生も間違う。時はある。

○藤崎政策総括監

質問する力って、幼い頃は、みんな、ねえねえって言うってお母さんに聞いたりとかするじゃないですか。でも働いていたりすると忙しかったりして、親の立場で反省する面もあるなと思います。

○山口知事

子どもが聞いたときって大事だね。

○藤崎政策総括監

そういうねえねえにちゃんと付き合うことが先々大切になると思います。

○山口知事

すごく大事。もっと小さいときの家庭教育で、答えを先に教えたりするのではなくて、自分で考えさせることがすごく大事。

○藤崎政策総括監

抑えつけられた子どもって、多分そういうことをやらない子どもになると思うから、そこを家庭の中でもずっと引き出すようにやると、その10年後とか、ちょっと違うんだろかなと思います。

○山口知事

子どもってさ、関心が多いから、顔を上げよう、上げようとするのに、親が押さえつけて、ここだけ見なさい、危ないからとかさ、せっかくこうしてんのにさ。そこが大事。

○甲斐教育長

そこが変わると、その後に子どもにとって非常に良い影響を与えると思う。

○山口知事

どうやったらいいんだろう。

○飯盛（いさかり）委員

今教えている先生たちも既にそういうふうな学生時代を小学生時代に過ごしていると思います。だから、おかしいとか感覚がないというところからまず覆していかないといけないのではないかと思います。

○山口知事

先生も今って、大体20代とかだから、もう僕らよりもずっと下の世代が先生をやっている

ということだよね。

○飯盛（いいもり）委員

我々より年下の先生が多いですね。

○山口知事

そうだね。

○飯盛（いいもり）委員

質問する力にもちょっと結びつくかなと思うのですが、うちの職場、園で大切にしているのがオープンクエスチョン、さっき言われたように、イエスカノーとか、これいいよ、悪いよ、駄目でしょうではなくて、大人が何でそう思うのとか、どうしたらこういうふうになるんだねとか、質問形式で問いを投げかけるような教育の仕方が今、少し日本は少ない気がして、うちも他の園の真似をしたのですが、オープンクエスチョンというのを様々なところに貼って、先生たちがそれを見て、常にオープンクエスチョンしないといけないというマインドにさせて、子どもたちと接するようにしているんですよ。そういうことで質問してもいいんだと。幼児教育って正解、間違いがあまりないですね。自分たちで探究して色々なことを学んでいくというのが幼児教育なので、何かそこで安心感を入れると、今度、小学校、中学校、高校で発言してもいいんだと思うような子が増えれば、変わっていくと思います。

○山口知事

アメリカや、海外は発言しなきゃいけないって、大学はそうだね。

○飯盛（いいもり）委員

（海外で生活していた際に）言われたのが、物言わないとばかだよと。

○山口知事

いつの時期から。初等教育、もっと前から。

○飯盛（いいもり）委員

もっと前から。

○山口知事

そういう文化はどうやって醸成されているのか。

○飯盛（いいもり）委員

幼稚園のときからみんな、「はい、はい、はい」と。おとなしい子もいますよ。先生に手を

挙げて発言したりとか、その代わり、人が発言しているときに横から発言をするのはやっぱり先生が止めたりして。

○山口知事

それはだめ。ルール違反。

○飯盛（いいもり）委員

ルール違反と。きちんと言う子は言うし、プレゼンをする機会が多いですね。

○飯盛（いいもり）委員

県立高校でも、佐賀商業のＳＳプレゼンですね、発表上手な子はすごい上手なんです。先生たちに聞くと、もう彼は慣れていますとか、彼女は慣れていますという人がいるので、やはりプレゼンに慣れている生徒と、そうじゃない生徒の差って、場数を踏んでいるか、踏んでいないかの違いかと。

○甲斐教育長

今、機会が多いので、我々の高校のときよりは結構みんなしっかり発言できるようになってきているという手応え、もちろんそうじゃない子もいるとは思いますがそれでも。

○飯盛（いいもり）委員

パワポの技術なんかすごいですよ。あれはびっくりする。

○飯盛（いいもり）委員

私、甲斐教育長が教育大綱をいつも持ち歩いていると聞いて、私も２冊ぐらい持っているのですが、様々な場面で紹介していて、今日、県庁で子ども計画を策定する会議があって、そこでも取り上げていただいて、教育大綱はすごい大切だなと思うし、今、教育現場、学校までは広まっていっていると感じています。保護者の皆さんにも広めることができれば良いと感じています。

○山口知事

保護者か。

○飯盛（いいもり）委員

保護者も、学校はこのような計画に基づいて教育に従事している事を知ってもらいたいのかなど。

○藤崎政策総括監

県民だよりも、保護者へ訴求するような紙面で、掲載したいと考えております。

○飯盛（いいもり）委員

色々な会議に行っていて、学校教育も大切ですが、家庭の教育ですごく子どもに差がつくと思う。学校と家庭の連携ってすごい大切。

○甲斐教育長

P T Aとか、保護者の方々が出席されるときには紹介して、先回りしないでくださいというのは一生懸命お願いしている。

○山口知事

そうだね。先回りね。

○甲斐教育長

ついしたくなる気持ちは分かる。子どもがどうしたらどうなる、何か予言者みたいになっちゃったら駄目ですよということにして、もちろん、危ないことは止めなくてはいけないんですけれども、転ぶと危ないんじゃないくて、本当に命の危険とか、人を傷つけるとか、そういうのは止めなきゃいけないですが、そうではない場面で、先回りしないでくださいというお話をしています。

○山口知事

保護者も自分の枠の中で子どもを抑えたいなんて思っていないよね。

○飯盛（いいもり）委員

そうですね。習い事とか、興味を示して、合う、合わないはあるじゃないですか。興味を示したものであれば長続きすると思いますし、何かあるとやりたいと言い出すしですね。やっぱり長続きするのはやっぱり興味があるものかなと。そこは親としては応援したいなと思います。

○甲斐教育長

親も良かれなんですよ。良かれのところでどう考えるかということかと思います。

○飯盛（いさかり）委員

よく保護者と面談する際に言うのは、どういう子どもになってほしいと思われていますか

ということを尋ねて、だから今こういうふうにしたほうが良いと、我々様々な例を知っていて、話をしていますと。保護者の方は我が子のこと、そして家で暴れて困るから、こんなことを学校でしないで欲しいと言って、学校としてはこの子の成長を見ながら、1年で随分成長してきているから、一緒にスタートに立って、これから先こういうふうになるように持っていきましょうよと言ってもなかなか理解が得られない家庭がまだありますね。

○山口知事

学校の先生ってずっと累積していくわけじゃないですか、生徒の数がどんどん増えていて。ある程度この時代にこんな感じの子はこんなふうになっていくんじゃないかみたいなデータベースは頭の中に入っているんですか。

○平尾部長

やっぱりそうでしょうね。すごい生徒の数を見てこられているから。

○飯盛（いさかり）委員

特に特徴的な子は強く残りますよね。

○山口知事

それは小学校から。

○飯盛（いさかり）委員

あの子があ大学に入ったとかですね。

○山口知事

高校だったらもう大体分かるよな。

○笹谷教育振興課長

そうですね。

○飯盛（いいもり）委員

中高一貫校で教員だった時、中学校の時にこういうきっかけでこう変わって、高校で伸びて、大学でこういった研究して、仕事はここまで入った。あのときのこのきっかけがよかったんだなと思い返します。

○山口知事

そういうのは、学会とかで先生同士の会議の場で共有されているのか。

○笹谷教育振興課長
進路検討会でも行っています。

○山口知事
横で広げるわけね。

○飯盛（いいもり）委員
各学校です。

○山口知事
そうだよね。きっかけて大事だもんね、子どもの頃って。ちょっとした誰かの一言だった
り。

○平尾部長
すばらしいアドバイスがやっぱりその子の人生を変える。
多くの生徒を見ておられるけど、名前はよく覚えられていますよね。感心しますね。

○笹谷教育振興課長
顔を見て話すと記憶に残りますからね。

○平尾部長
すごい記憶力だなと思って。

○飯盛（いいもり）委員
でもありがたいことに日曜日、マラソンを走らせてもらったんですけど、いろんなところで
やっぱり応援していただくじゃないですか。お世話になった先生たちが、すぐ分かるし、分
かってもらえるし、それはうれしいなと思います。

○山口知事
先生って覚えているもんだね。

○溝上委員
本当ですね。

先ほどおっしゃった親が子どもにどうなってほしいのかという話を、実は先週、子どもた

ちをキッザニアに連れていったんですよね。職業体験がいっぱいあって、初めてうちの息子が薬屋になりたいと言ったんですよね。

○溝上委員

長男は、ANAの体験に2回行って、それになりたいとかって言いました。考えてみれば、息子に「何になりたいんだ」って家の中で聞いていたなと思って、選択肢ってどれだけ見せていたか、憧れとあって、どれだけ子どもに出してあげていたか、感じる瞬間みたいな、出会いみたいなものってちょっと足りていなかったなと思ったんですよね。

○山口知事

有効なんだね。

今年、新年度予算でキッザニアと連携事業をやるんですよ。あれは何月だっけ。

○藤崎政策総括監

11月です。

○山口知事

11月に。キッザニア本体とも連携して。それを多久でやる。

○藤崎政策総括監

産業技術学院をメイン会場にして、そこからバスで企業さんに行ったりとかします。

○甲斐教育長

実際の現場までね。

○山口知事

良いね、そうやってできるだけオープンに小学生が参加してくれたらね。

○溝上委員

生活習慣病の薬を、自社の薬局で初めて薬が出された人、高血圧ですって言われて出された人が、1年後に薬を続けている率って60%だったんです。40%はやめてしまうことを現場の薬剤師と大学生と高校生と一緒に考えるワークショップを自社で開催したところ、現場の薬剤師が思いつかないことを学生が言うんですよね。血圧を書かせたらいいんじゃないとか、メールを送ったらいいんじゃないとかあって。少し改善が出てきたところもあって、そういうのが成功体験とか、さっきの行政と学生さんと一緒に考えて、まちの施策を考えるとか、こういうのと企業が一緒にやる機会がたくさんあると良いですよ。

○山口知事

今年度、もう一つ、挑戦的な事業を仕掛けていて、高校生に部活の備品を勝手に決めていいよと。生徒間で、生徒会でも何でもいいから、みんなで運動部とか文化部とか、みんなでルールを決めてくれたらという事業です。

○甲斐教育長

ルールを決めるまでの過程が大事だと思います。

○平尾部長

そうですね。生徒同士でいろんなお話を。

○甲斐教育長

単純に割り算しても面白くないから、どういい具合に使うか。

○甲斐教育長

色々考えて来年も予算が確保されるのかとか質問が来たりして、そうであれば、順番を考えようとか、生徒も色々考えを巡らせると思います。

○山口知事

自分事だから。

○平尾部長

来年、再来年とか順番よと。今年はここに譲るからとか、質問が。

○甲斐教育長

でも、高校生は学年が上がっていくから、そうならないかもしれないし、分からないなど。

○荒木委員

おそらく、これに参加している子どもたちは、今何を頑張っているのと聞いたら、目をきらきらさせて、頑張ってお金を取ろうとしているんですと言うと思います。そういうことを言える子どもたちが増えてほしいと思っていて、何か毎日、例えば携帯ばかり見てとか、受験勉強が忙しというのもあるんだろうけど、そうではなくて、何か目的を持って今これを頑張っているんです私というような若い人がもっと増えたらなと思っています。

○加藤委員

本当の意味でのキャリア教育につながるような。

○甲斐教育長

決まった収入をどう使うか。

○溝上委員

お金の勉強させるなんてすごいです。

○飯盛（いいもり）委員

部活の顧問の先生と話しするときに、お金が足りないんですよと、カヌーはお金がかかるんですよという話を聞いていたのですが、顧問の先生の悩みを、部員たちはどのぐらい把握しているのかな。それを共有することで、これが盛り上がる。

○山口知事

確かに。そういうことが分かってくるよね、いろいろなことが。

○飯盛（いいもり）委員

顧問の先生はすごい困っているのはいつも伝わるんですが、生徒たちも一緒に困って問題意識を共有して、これにつながるといい教育につながるかと。自分たちで企画してお金を取りに行くって。

○山口知事

この事業は、SSP推進局が所管するんだよね。

○飯盛（いいもり）委員

コンペとか応募して、選考していく手法になるのですか。

○山口知事

全ての高校が対象。予算額は違うけどね。

○飯盛（いさかり）委員

今日のテーマの「自分で考え行動する子ども」が完成したなという視点、自立できたというような視点として、ある人の言葉で、全く逆のようなんだけれども、頼るところをどれだけ持てたかという言葉がこの頃教えてもらいまして、困ったときにはここに尋ねればいいんだと。この分野はこっちだと。これだったらあの人に聞けばいいとか、そういったところもゴールとして持っておけばいいのかなと。

○山口知事

たくさん相談して良くて、その上で決めてくれれば良いので、やっぱり相談はいいよね、したほうがみんなと一緒にね。いろんな人に聞いていると、自分の中でどう。俺たちは大人になったって、人に相談することを通して、自分の中で整理がつくよね。

○平尾部長

整理もつくし、新たな発想が生まれたりします。

○山口知事

自分だけで考えていると本当にこれが正しいのかなと思ったりとかさ。

○平尾部長

人に聞くということを想像することは大事ですよ。

○飯盛（いさかり）委員

大人であれば、今まで培ってきた人脈とか、これはあの人に聞けば詳しいからとかね。

○平尾部長

そこがあるんですね。

○加藤委員

とんちんかんな質問でも、質問する力がすごく大事だと思うんですが、その回答する力、とんちんかんなときは大人の価値観で回答するじゃないですか。そこがやっぱりすごく必要、回答する力。だから、そこからコミュニケーションが生まれてくる。

○山口知事

何かいいじゃん。グッドクエッションって、要はいい質問ですねと言われるとちょっとうれしいじゃないですか。

○飯盛（いいもり）委員

叱るんじゃなくて、褒めて伸ばす。

○山口知事

ずっとやっているよね。質問は褒めたほうがいいよね。

○飯盛（いいもり）委員

さっきの知事の話聞いていて思ったのですが、社会人になって質問するのが怖かったら、結局、上司から「おまえはそんなのも分かんのか」って怒られるのが怖いから何か聞けないというのが確かにありましたもんね。でも日本の社会ってそういう場面が多くないですか。

○加藤委員

様々な視点があるから、とんちんかんな質問でも、良い視点だねとか、質問したことに対してはプラス思考で回答してあげるといのは大事なかなと思います。

○甲斐教育長

質問はよく受け止めて、あなたが言っているけど、こんなにいいところに目をつけたねって言われると自信を持って次からも質問してきつとそれまでの経験が質問する力を伸ばしていく。

○山口知事

みんなはさ、1つぐらい質問したいことを持っていたりするのかな。ただ言わないだけで。

○飯盛（いさかり）委員

聞いている子は持っていると思います。

○甲斐教育長

関心を持って考えていたら質問したいことって出てくるんですよ。

○山口知事

出ますよね。

○甲斐教育長

単なる受け身だったら出ないかもしれない。

○山口知事

そういうこと。

○甲斐教育長

単なる受け身だと、いいお話し聞いたということで終わる。

○山口知事

やっぱりこれは大事だね。

○平尾部長

そうです。

○甲斐教育長

いいお話し聞いたで終わっちゃうかもしれない。

○平尾部長

色々な会議でも、結局、会議に出たら一言は話すと我々の社会の中でも言うじゃないですか。会議に出ている以上一言は何か話をして、会議に参加しようねと、そういうためにも質問する力というのは非常に大事です。

○溝上委員

結構会議で、よく発言する人は発言するじゃないですか。上役の人が発言してしまうと下の人は発言しづらくなるため、若い人から意見を聞くようにしているんですよね。

また、指導しないといけないときも褒める。最初に相手のいいところを見つけて褒める。その後に、いやよくできているね、すごいよ、でもね、みたいな感じで指導をしていくというのをここ数年気をつけるようにしています。

○藤崎政策総括監

そろそろお時間になりました、

以上をもちまして第31回佐賀県総合教育会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。